

3 みんなで作る学校のトイレ



野田 敬三
NODA Keizou

近江八幡市教育委員会事務局
教育総務課/教育施設整備推進室

以前は公衆トイレと並び、使いたくないトイレの象徴だった学校のトイレ。滋賀県近江八幡市は、児童生徒参加型で学校のトイレ改修を進めたことが評価され、平成27年に「日本トイレ大賞」を受賞した。どのように学校のトイレを「みんなのトイレ」に変えたのだろうか。

20年後を見越した学校の教育環境改善

近江八幡市は滋賀県のほぼ中央に位置し、琵琶湖最大の島である沖島を有しています。ラムサール条約の登録湿地である「西の湖」は、琵琶湖で一番大きい内湖であり、ヨシの群生地である水郷地帯は琵琶湖八景の一つに数えられています。

古くから農業を中心に栄えてきましたが、中世以降は湖上の交通の要衝という地の利を得て、多くの城が築かれました。織田信長の改革精神により開かれた楽市楽座は、豊臣秀次公の自由商業都市の思想に引継がれ、近江商人の基礎を築きました。こうした歴史的背景から、近江八幡市には各時代を代表する歴史遺産が点在するとともに、風情が薫る景観は、今日も各所で受け継がれています。とりわけ戦国時代に造られた八幡堀界

隈は、重要伝統的建造物群保存地区となっていて、時代劇のロケに多く利用されています。

豊かな自然環境や歴史的・文化的資産に恵まれた本市は、『「子ども」が輝き「人」が学び合い ふるさとに愛着と誇りを持ち 躍動する 元気なまち 近江八幡』を目指して20年後を見越し、積極的に学校の教育環境改善に取り組んでいます。今回はその中の「児童生徒参加型のトイレ改修」の取り組みについて紹介します。

なぜ児童生徒参加型のトイレ改修なのか

古来、日本ではトイレを「ご不浄」と呼び、不潔な場所として位置づけてきました。とりわけ市内の学校のトイレは、建設後30年以上経過しているため大半が湿式の和式便器であり、生活様式の変化によりうまく使えな



写真1 アンケートの集計(中学校)



写真2 トイレのプランを検討中(中学校)



写真3 改修前のトイレ(中学校)



写真4 改修後のトイレ(中学校)

い子どもたちがいます。また、「暗い」「くさい」「汚い」「怖い」「壊れている」という5Kのいくつかに該当し、子どもたちを「トイレに行きたくない」という気持ちにさせてしまうような場所でした。

トイレに行くのを我慢することは健康上良くありません。また、閉鎖的なトイレは人の目が行き届きにくく、「いじめの温床」となりかねないことから、近江八幡市では「明るく開放的なトイレにしたい」と平成23年度から年間1、2校のトイレ改修を進めてきました。

これまでトイレは、学校、市担当者、設計事務所が協議して設計や改修を行う行政主導の方法をとっていました。しかしそれでは、エンドユーザーである児童生徒にとって、本当に使い易いトイレになるのかという懸念がありました。そこで、学校や児童生徒の意見を聞いて、共に考え作り上げることによって、「自らが手がけたトイレを大事に使おう」という気持ちが芽生えてほしいとの思いから、児童生徒参加型のトイレ改修が始まったのです。

最初の一步

私たちはまず、中学校のトイレ改修のワークショップに取りかかりました。とはいえ、市担当者が学校に赴き、ワークショップを行うのは初めてのことでした。校長、教頭、生徒会担当教諭との最初の協議で「全ての生徒にトイレの設計と工事に参画してもらいたい」という私たちの想いを伝えました。ところが、既に年間の学習日程が決定されていることから、授業の一環として取り組



写真5 啓発ポスター(中学校)

むことはできないことや、生徒数が多く学校として管理しきれないなどの理由で、当初の計画を変更せざるを得ませんでした。その結果、生徒会の役員を対象に、放課後を利用してワークショップが始められることになりました。

ワークショップの設計体験は、私たち担当者が描いたいくつかの平面プランのうち、生徒たちが最適だと考えるものを選ぶというものでした。その後、設計案を示したり、仕上げ材や機能面の話をするうちに、生徒たちのスキルを確認しながら丁寧に説明してフォローをすれば、自ら改修プランを考えることができるようになってきました。

年々、ワークショップで行う作業内容も充実したものとなりました。設計プランを選択するだけの方法から、アンケートの結果や施設見学を踏まえて自分のチーム



写真6 大学院生と遊ぶ児童 (小学校)



写真7 トイレ完成披露式 (小学校)

の要望を作成し、相手チームに要望書として渡します。一方、相手チームの要望を聞いてトイレのプランニングに反映するという、オーナーと設計者双方の立場を体験しながら設計を行うまでに至りました。

写真5はトイレ改修完成の2カ月後に学校で撮影したものです。これは「トイレをきれいに使ってもらうにはどのようにしたらいいか」を自分たちで議論し、その結果「啓発ポスターを作成して掲示する」という生徒の自主性や意識の変化が感じ取れた一面です。

小学校の取組み

平成25年度からは、小学校で参加型のトイレ改修工事を進めていくことになりました。小学校を対象にした場合、トイレに対する想いにバラつきが大きく、本当に児童たちが望んでいるトイレを創ることができるのか心配でした。その不安を解消するため、小学校のワークショップではこれまでの児童、学校、市担当者に加え、「活動の通訳者」として、また「総合プロデューサー」として大学院生を起用するという新たな取組みにチャレンジしました。

これは中学校を対象にしたときと同様、児童たちと仲良くなり、さまざまな活動を通じながら、本当に望んでいるトイレは何かを見出し、それを実現させることで、児童たちが新しくなったトイレに行くことが楽しみになり、「自分たちが考えたトイレだから大切にしよう」と愛おしく思う気持ちを育んでもらいたいと考えたからです。

まずワークショップで、大学院生たちは、児童たちから意見を聞き取るために仲良くなることから始めました。チームで色をそろえた上着を着て、一緒に遊んだり給食を食べたりして、一気にその距離を縮めていきました。次に、学年ごとに「理想のトイレ」を絵に描いてもらいま

した。「ピカピカのトイレ」や「全自動トイレ」などのトイレに対する夢や希望が寄せられました。それに対し大学院生たちから、「絵やアンケートで済ますうわべだけの取組みではなく、新たなプログラムによってもっと掘り下げていきたい」との建設的な意見が出されました。そこで提案されたのが、空き教室に実物大の模型を作ることでした。

大学院生たちは児童たちと段ボールで作った「便器」に腰掛け、個室（ブース）の大きさや棚の高さを検証するなどして、設計につながる新たな情報を得ました。この貴重な経験を通じて、児童たちの想いを設計プランに反映し、工事へとつなぎました。

これらの取組みは平成27年度で3校目となり、既に2校の工事が完成しています。中には、トイレに行くことが楽しみに感じられるように「7色に彩られたカラフルなトイレ」や「ブースを潜水艇に、周囲の壁を海に見立てて魚の絵を描いたトイレ」などがあります。児童たちが楽しくなるように雰囲気重視したトイレや、高学年用として少し大人っぽいトイレなど、私たちが今まで考えつかなかったようなプランが実現できました。

固定概念が最大の壁

このように、大学院生たちの活動は児童たちの意見集約をはじめ、設計や施工の体験プロデュースにまで及びました。私たちは市担当者としての役割を見直し、可能な限り大学院生たちに任せ、それらの取組みが脱線しないよう見守ることに徹しました。

ここで私たちが心がけたのは、中学校であれ小学校であれ、生徒や児童そして大学院生に対しプランや企画を参加型として委ねたのなら、担当者の概念を覆すような結果が出たとしても、学校として守らなくてはならな

いルールや、公共施設として許容できるものなら受け入れる寛容さを持つことです。担当者が「あれはダメ、これはダメ」と言ってしまうと、せっかく参加型として求めたものが絵に描いた餅となってしまう恐れがあります。

その結果、大学院生たちのモチベーションが上がり、自分たちが考えた新しいトイレをきれいに使ってほしいと、「トイレおそうじマニュアル」を作って児童に説明するなど、私たちが求めた以上の成果につながりました。

通過点である今

朝、自宅のトイレを我慢して学校に行く子どもを気にしたお母さんが「トイレに行ってから学校に行きなさい」と言ったところ、「学校のトイレに行きたいから我慢するの」と答えたというエピソードがあります。また、中学校の男子トイレではトイレトペーパーの使用量が大幅に増えるなど、これまでのトイレでは予想もつかない反響がありました。さらに、児童生徒たちの意見を反映して設置した擬音装置付のトイレ、自動式の水栓、全身を映し出す鏡、ランドセルなどを置ける棚なども好評でした。

工事後の学校職員に対するアンケートでは、「ただきれいになっただけでなく、児童にとって使い易く、安心して使えるトイレになった」や「児童自らが意見して、自分たちの環境を変えるという特別な機会となった」などの回答がありました。この取組みが、私たちが目標としてきたことの結果として表れつつあることを嬉しく感じます。そして、児童生徒が一生懸命プランを考える姿や、目を輝かせて完成したトイレを見ている姿を見ると、次のワークショップもさらなる成長をして頑張ろうという気持ちになります。

平成27年9月に近江八幡市は「日本トイレ大賞」を受賞しました。これは、内閣府の有識者会議である「暮らしの質」向上検討会の提言にて、暮らしやすい空間へと転換する象徴としてトイレが取り上げられ設けられた賞です。快適なトイレの普及は国の施策によって推し進められています。それが、私たちが進めている学校トイレ改修の追い風となることを願っています。この事例の



写真8 実物大の模型トイレでの聞き取り (小学校)

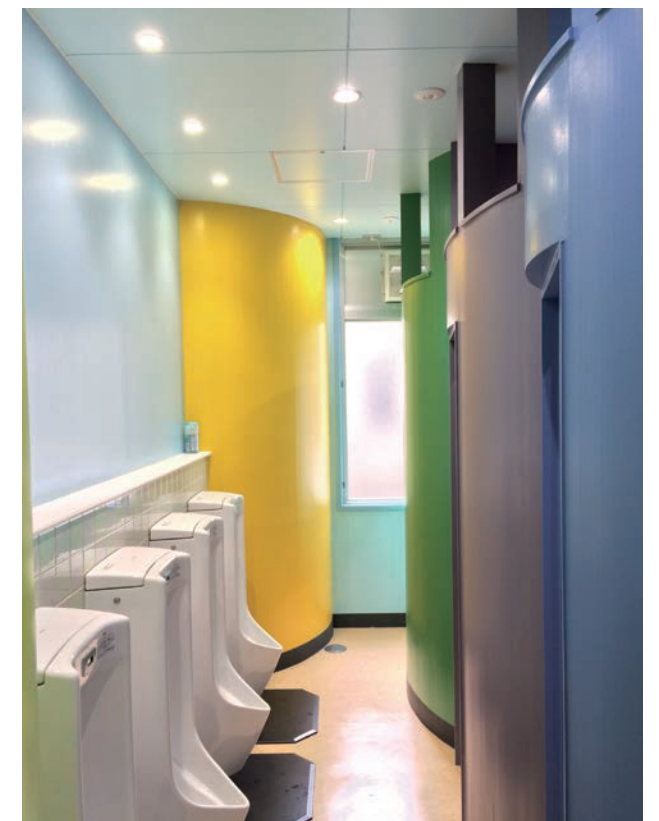


写真9 完成後のトイレ (小学校)

紹介が、児童生徒参画型のワークショップの実行を躊躇されている方々への「最初の一歩」につながるとうれしく思います。